
BLACK LOVE

如月乙姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BLACK LOVE

【Nコード】

N3508D

【作者名】

如月乙姫

【あらすじ】

黒の組織のジン×ベルモットの恋愛小説です。クリス（女優）として日本に来ていたベルモット。久々にジンと会う。だが、ジンの部屋に行く途中で……

★第1話★

私の名前はクリス・ヴィンヤード。

アメリカのムービースターだ。

表の顔は……

私には裏の顔がある。

ベルモットと言う暗号名。コードネーム

非合法組織の構成員……

これが私の裏の顔。

今、私はクリス（女優）として日本に来ていた。

「クリスさん、お願いします!!」

タバコを吸っていた私はマネージャーの声でタバコを消して立ち上がった。

「お疲れ様でした!!」

この声が響いた時、私は時計を見た。

「00・24」

『もう日付が変わってるじゃないの』

私はそう思ってマネージャーを連れて地下駐車場へ向かった。

「お疲れ様です」

車に着くと運転手が劳いの言葉を掛けてくれた。

『演技が下手ね。声が冷たいわよ』

私は漠然とそう思った。

車に乗ると息をついた。

『今日から3日休みだったわね』

荷物を入れてた運転手が戻って、私はマンションに向かうよう指示を出そうとした……

ピピピピ……ピピピピ……

携帯が鳴った。

テロップを見ると

「G i n」

と流れている。

「もしもし」

『今夜、大丈夫か? ?』

「ええ、大丈夫よ」

『それなら、本部（組織）のビルに來い』

電話は一方的に切れた。

私は運転手に本部のビルに向かうよう指示を出した。

ビルに着くと私は運転手に今日は上がっていいと伝えてからビルに入る。

ロビーを横切り、エレベーターに向かおうとした。
すると、後ろから声が掛かった。

「よう：久しぶりだな」

ジンがロビーにいた事に気付かなかった。

『……相当、疲れてるらしい……』

私は思いながらジンと共にエレベーターに乗った。

ジンの部屋のある階に着きエレベーターが止まった。

ジンが先に降りて私も続こうとした。

「クラッ」

私はめまいがして壁に手をついた。

「ベルモット! ? : 大丈夫か? ?」

心配してジンが声を掛けてくれた。

「だ、大丈夫よ：少しめまいがして」

私は壁から手を離し歩き出そうとした。

「クラックラクラッ」

また、めまいがした。

さっきよりも酷い。

『えっ? ?』

私の目の前が暗くなっていった。

「ベルモット??:...どうした??:...クリス!!」
ジンのそんな声と
ドサッ

と言う音を最後に私の目の前は真っ暗になった。

★第2話★

『私…死んだのかしら?』

私の頬にそっと温かい手が触れた。

『誰…??』

そして、声が聞こえた。

「……クリス……」

私は目を開けた。

「……ジ…ン…」

視界が開くとジンが私の顔を覗いていた。

「クリス…大丈夫か??」

「ええ、大丈夫よ…私??」

私は起き上がろうとした。

「……っ…!??」

身体中にだるさと痛みが走った。

「寝ている…気付かなかったのか??」

私はジンの言葉の意味が分からない。

「何が??」

ジンは呆れたように言う。

「熱を計ったら、38、8℃あったぞ」

私はジンの言葉に驚いた。

「倒れたのは熱と疲れだな…疲れから熱を出したってのが正しいと思うがな」

ジンはキッチンに向かいながら言った。

「…粥…作ったから食うか??」

「ありがとう…:…いただくわ」

ジンはベッドルームまで、お粥を持ってきてくれた。

「あちいから気をつけて食えよ」

私はお粥を一口食べた。

「美味しいわ」

「そうか」

私はお粥を食べ終わると眠ってしまった。

夜中、喉が渴いて目が覚めた。

「03・27」

時計の表示はそうになっていた。

リビングに出るとジンがソファで寝ていた。
私は起こさないように毛布を掛けようとした。

「……んっ…クリス…?」

「あっ、ジン…起こしちゃったわね」

「いや…どうした?」

ジンは起き上がりながら聞いてくる。

「喉が渴いて」

「そうか。ベッドまで持っていく…戻ってろ」

ジンに言わた通り、部屋に戻った。

ジンは水を持って来る。

ジンは私が水を飲み終わると出て行こうとする。

「早く寝ろ」

ドアに向かうジンの髪を私は掴んだ。

「早く寝ろって…っ…!!」

ジンは怒鳴るのを途中で止めた。

「…クリス…コップを置いて来る。待ってろ」

ジンはキッチンにコップを置いて戻ってきた。

「ここにいる…寝ろ」

ジンはベッドに横になりながら言った。

私はジンの腕の中に潜りこんだ。

「ありがとう。ジン」

眠りに落ちる寸前で私は言った。

朝、起きるとジンがいなかった。

私はリビングに出た。

「起きたか：早く座れ。メシだ」

私は椅子に座った。

「熱は下がったから大丈夫だと思うが今日は休め」

ジンは椅子に座りながら言った。

「ええ、分かったわ：ジンも休みなんですよ？」

ジンは顔を上げた。

「：ああ」

「じゃあ、今日は一緒にいましょう」

「：いいぜ」

二人の会話は続いた。

この日が甘い蜜月になったのは言うまでもない。

★第2話★（後書き）

読んでいただきありがとうございました。ジンベルの幸せについて書いてみました。途中からジンもベルモットも「なんか違う」って感じになってしまったが楽しんでいただけたのなら幸いです★

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3508d/>

BLACK LOVE

2010年10月11日22時17分発行